

第12回深草文化交流

2015年1月10日(土)

～伏見で活躍した戦国武将列伝～

らくたび 山村純也

＜豊臣秀吉の登場以前＞

伏見は京都盆地の南に位置し、伏水から伏見という地名になったように、地下水が豊富な場所です。平安時代以前、京都の二大勢力の一つであった豪族秦氏は、抜群の治水技術を持ち、洛西に拠点置きながら洛南へも進出してきました。当時の一族のリーダーのひとりであった秦伊呂具は、伏見稻荷大社の創建に深く関わったとされています。

平安時代に入ると伏見は水運の便がよく、京都市内に比べて気候も穏やかであったため、南隣の宇治とともに貴族の別荘地として歴史に登場します。その後、平安末期になると貴族藤原氏による摂関政治は終焉を迎え、天皇が早期に引退して上皇となって政治を行う院政時代が始まります。この院政の舞台の中心となったのが伏見の鳥羽離宮でした。しかし、院政時代はまた武士の時代の始まりでもあり、その後は鎌倉時代、室町時代と京都は度々戦乱に見舞われることとなり、伏見もまたその戦禍を被りました。特に応仁の乱では、醍醐寺、随心院、勧修寺などが焼失し、甚大な被害を受けました。

＜豊臣秀吉の登場＞

戦国時代を独自の戦い方と領国経営で切り従えてきた織田信長でしたが、最後の最後で最も信頼する家臣であった明智光秀の裏切りにあい、本能寺にて無念の最期を遂げました。これによって台頭してきたのが、織田家臣団の有力武将であった**羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)**でした。秀吉は本能寺の変の際、織田家にとっての最大のライバルであった毛利家と備中高松城にて対峙していましたが、この事変をいち早く知ると「中国大返し」を敢行し、明智光秀を「山崎の戦い」で討ち、大きく天下取りへと近づきました。その後も、清州会議で自らの地位を高め、対立していた柴田勝家を「賤ヶ岳の戦い」で滅ぼすと最大のライバルであった徳川家康を従え、九州、関東、東北を平定して天下人となりました。

秀吉は戦国時代の終焉を決定づけるべく、検地と刀狩を大規模に行い、兵農分離を急激に進めました。また各地の鉱山を開発し、南蛮貿易を通じて巨万の富を生み出し、大坂に壮大な城を築くとともに、洛中にも聚楽第を造営して後陽成天皇を迎え、仕上げに大阪、京都、奈良、滋賀の交通の要所であった伏見に、自らの居城である伏見城を築くなど、その勢力は頂点に達しました。伏見城を築いた秀吉は、全国の大名を伏見に呼び寄せて、応仁の乱以降荒廃していた伏見を城下町として復興させました。

伏見城が建てられた古城山の近くには、現在も大名屋敷の名が地名として残っています。侍屋敷址には、丹波橋、肥後橋、阿波橋、豊後橋、伯耆町、備後町、讃岐町などの国名や、治部町(石田三成)、松平筑前、毛利長門、福島大夫、筒井伊賀、井伊掃部、水野左近、長岡越中、片桐町、景勝町、桃山町島津、桃山町三河(徳川家康)、桃山町正宗、桃山最上町といった大名の名が残っており、面白いのは桃山町永井久太郎で、これは永井久太郎という大名がいたのではなく、永井右近大夫と堀久太郎の二つの屋敷にまたがっているところから、

二つの大名の名を合わせて町名となったのです。他にも、賤ヶ岳七本槍のひとりとして活躍した脇坂安治は、官職名が脇坂中務少輔であり、これを人々が中国風に「中書はん」と呼んでいたことから屋敷址は、中書島という地名となりました。また下町には紺屋町、材木町、魚屋町、塩屋町、船大工町、瀬戸物町など職業を冠する地名が残っています。

伏見・淀の城郭

木幡山伏見城 こはたやまふしみじょう
地震によって倒壊した指月伏見城に代わって慶長2年(1597)に築造された。資材には聚楽第から多くを移築したという。秀吉は最晩年をここで過ごした

指月伏見城 しげつふしみじょう
天正19年(1591)、関白職と聚楽第を秀次に譲った秀吉が隠棲。文禄2年(1593)秀頼誕生を機に邸を居城に造り替えた。しかし、慶長元年(1596)の大地震で倒壊

伏見桃山城
昭和39年(1964)遊園地の施設として復元建設された模擬天守。現在は非公開

向島城 むかいじまじょう
指月伏見城の出城として築造された。江戸時代には徳川家康の居城となったが、元和6年(1620)に破却された。現在は地名にのみその痕跡を残している

淀城 よどじょう
中世からあった城塞を、豊臣秀吉が側室茶々のために改築、これがために茶々は「淀殿」と呼ばれるようになった。文禄3年(1594)に破却された

引用：京都歴史散歩：成美堂出版

<伏見城の戦い> 慶長5（1600）年7月18日～8月1日

伏見を繁栄に導いた秀吉亡き後は、遺言に従って五大老・五奉行が後継者の豊臣秀頼を支えていくという体制がスタートしましたが、これが機能する前に、五大老筆頭であった徳川家康が、諸大名と勝手に姻戚関係を結びなど、天下取りへ向けた野心を徐々に現していきます。また豊臣家内部も加藤清正や福島正則らの武断派と、石田三成や小西行長らの文治派で互いに争うこととなり、大老のひとりで家康の次に名声を得ていた前田利家が亡くなると、ついに武断派の石田三成への襲撃によって、石田三成は伏見の自邸に籠って武断派と対峙するという事態にまで争いが表面化します。結果的には家康の計らいによって、石田三成が居城である佐和山城に蟄居し、政界から追放されました。折しも五大老の一人である上杉景勝は、家康の上洛要請を断って会津から出てこようとしなかったため、これを口実に家康は上杉征伐を行うことを宣言し、豊臣恩顧の大名も続々とこれに従って会津へ赴きました。家康がいなくなったこの際に兵を挙げたのが蟄居していた石田三成でした。三成は西国の大名を中心に打倒家康を呼び掛け、五大老のひとりである毛利輝元を旗頭に、家康に対決姿勢を打ち出しました。

石田三成が率いた西軍の最初に攻めたのは、徳川家康が居城としていた伏見城でした。秀吉は二度伏見城を築城しており、一度目の城は慶長地震で倒壊し、二度目の城はさらに壮大なものとなっていました。この城に家康は、腹心中の腹心であった鳥居元忠と1800名の家臣を置いていました。家康は、上杉征伐に向かう際に石田三成が兵を挙げることを予想しており、鳥居元忠の役目は家康に天下を取らせるために、伏見城で少しでも長く持ちこたえて討ち死にすることでした。攻め手の総大将は宇喜多秀家、副将は小早川秀秋で、その他に毛利秀元、吉川広家、小西行長、島津義弘、長宗我部盛親、長束正家、鍋島勝茂など総勢4万で攻めかかりましたが、死ぬ気で守る城兵の士気は高く、激しい攻防は10日間以上に渡って繰り広げられました。しかし、負けれない西軍は、最後は城内にいた甲賀衆を無理やり寝返らせて城内に火を放たせ、一気に攻め入りました。鳥居元忠は、最後は天守閣に籠って抵抗を続け、ついに生き残った全員380余名が自刃しました。この戦いでは、徳川家康の家臣である三河武士の忠義と頑強さを天下に知らしめることとなり、関ヶ原の戦いの華々しい前哨戦となりました。



『慶長五年伏見城攻図（部分）』（長崎県・常盤歴史資料館所蔵）

< 伏見城の遺構一覧 >

- 城門
御香宮神社（伏見区）表門（大手門を移築）
栄春寺（伏見区）総門

豊国神社（東山区）唐門
西本願寺（下京区）唐門
二尊院（右京区）総門
観音寺（上京区）山門
瑞宝寺旧山門（兵庫県神戸市）
浄照寺（奈良県磯城郡田原本町）表門（伏見城高麗門を移築）
本山寺（大阪府高槻市）中の門

● 櫓

福山城（広島県福山市）伏見櫓
（重文・解体修理時に発見された墨書きにより伏見城よりの移築が確定された）
※徳川幕府防衛拠点
膳所城
岸和田城

● 殿舎

金地院（左京区）方丈（重文）
養源院（東山区）本堂
日暮御殿 - 都久夫須麻神社（滋賀県長浜市・竹生島）本殿（国宝）
大通寺（滋賀県長浜市）本堂

● 石垣

御香宮神社
藤森神社
京都市立桃山東小学校には復元石垣列
淀城
桃山御陵参道
栄春寺（伏見区）総構え

● その他

諸侯控え室	三溪園（横浜市中区）
移動式能舞台	福山城（広島県福山市）、 現在は沼名前神社（広島県福山市・鞆町）（重文）
茶室	高台寺（東山区）時雨亭、傘亭（ともに重文）
軍議評定所	渡辺山守綱寺（愛知県豊田市）本堂
血天井	養源院、宝泉院、正伝寺、源光庵、天球院（京都市） 興聖寺（宇治市）、神応寺（八幡市） など
庭園	圓徳院（東山区）

＜豊臣秀吉関連＞

●寺院

源空寺…伏見城の巽櫓にあった秀吉の念持仏の大黒天を所持

月橋院…住職と旧知であった秀吉が月見の宴を催した

本教寺…秀吉より贈られたという牡丹が境内に咲く

墨染寺…秀吉の援助によって復興

醍醐寺…醍醐の花見に合わせて復興がなされ、秀吉自ら三宝院庭園を指示

栄春寺…伏見城の遺構とされる総門や、伏見城の伏見城総構え（土塁）が現存

●神社

伏見稻荷大社…秀吉寄進の楼門

古御香宮神社…秀吉の命によって御香宮神社が移転。その跡地に鎮座

＜徳川家康関連＞

●寺院

圓光寺…家康が学問所として創始し、現在は洛北に移転し、紅葉の名所へ

伏見御堂…東本願寺の前身にあたり、家康の寄進によって造営

●神社

御香宮神社…徳川家康が本殿を寄進

●地名

銀座跡・銀座町…家康が開設。江戸（東京）の銀座より古い歴史を持つ

両替町…家康の城下町時代、両替商が軒を連ねた

＜伊達正宗・海宝寺＞

萬福寺 13 世 竺庵浄印（じくあんじょういん）が、萬福寺の別院として創建し、享保 13（1728）年に、伊達家の屋敷跡に移転しました。大丸の創業者である下村正啓は竺庵に帰依して多くの援助を行い、現在もその関係が続いています。境内には伊達政宗お手植えのモッコクの木があり、伊藤若冲の「群鶏図」も所蔵しています。

＜島津義弘・大黒寺＞

真言宗の寺院で長福寺と呼ばれていましたが、元和元（1615）年に薩摩藩の島津義弘が守り本尊にしていた「出世大黒天」があることを知って薩摩藩の祈願所とし、寺名が改められました。こういった経緯から「寺田屋騒動」で亡くなった薩摩藩九烈士の墓があり、薩摩藩邸が近くにあったことから、西郷隆盛や大久保利通が密談したという部屋も当時のまま残されています。

「三河武士の鑑」と称された家康の忠臣

＜鳥居元忠＞（1539～1600）



家康が今川家に人質だった頃から使えた側近中の側近です。幾度となく功績を挙げましたが、感状をもらうことは決してありませんでした。主君の家康が感状を与えようとしたが、「感状などは別の主君に仕えるときに役立つものであり、家康しか主君を考えていない自分には無用なものである」と答えました。また、秀吉からの官位推挙の話が度々あったものの、主君以外の人間から貰う言われはないと断ったと伝えられています。伏見城の攻防戦では西軍に対して徹底して戦い抜き、最後

は城内に残った者全てが切腹するという壮絶な最期を遂げました。これを見た西軍は家臣にここまで忠誠心を植え付けた徳川家康の大きさを改めて思い知ったとされます。関ヶ原の戦いの後に徳川家康は、伏見城にあった血で染まった畳を、江戸城の伏見櫓の階上置いて、登場する大名達にその忠義示し、同じく血で染まった床板を供養するべく多くの寺院に移築し、「血天井」として後世に残しました。また元忠の嫡男忠政は、のちに山形藩 24 万石の大名となり、江戸時代を通じて幕府からお咎めがあったときも、元忠の勲功があまりにも大きいことから、その都度改易を免れて減封・移封となりました。

※伏見城攻防でのエピソード

徳川家康は上杉征伐に向かう前に、伏見城の留守を任せることを元忠に告げ、「上杉征伐同行できないのは不満に思うであろうが、これはよくよく考えてのことだ。ただ、手勢が足りないため、多くの家来をおぬしに残していけず、苦勞をかける」とわびたと言います。これを聞いた元忠は「なんのなんの、もし大阪で兵乱が起こらないならば、家来の数など気にすることもありませんし、もし兵乱が実際に起こってしまえば、どちらにせよひとたまりもないでしょう、どうせこちらで無駄に命を落とすくらいなら、ぜひ多くの家来を上杉征伐へお連れください。」と答えたと言います。その後は、主君水入らずで酒を酌み交わしながら家康の人質時代から今までの思い出話に花が咲き、あつというまに夜がふけていきました。元忠は足が悪く、席を下がろうにも支えてもらうため家来の助けがいるほどでした。部屋を出た元忠が、足を引きずりながら廊下を去っていくその足音を聞きながら、今生の別れになることを悟っていた家康は男泣きに泣いたと語り継がれています。

※はやり忠臣だった元忠の子孫

鳥居元忠の四男である鳥居忠勝の娘は、赤穂藩の家老であった大石良鉄（おおいしよしとか）に嫁ぎます。その孫が、赤穂事件（忠臣蔵）で有名になる大石良雄（内蔵助）でした。主君浅野長矩が江戸城内において刃傷沙汰を起こして即日切腹、赤穂浅野家は最終的に改易（取り潰し）が決まった後、主君浅野長矩の宿敵となった吉良義央（きらよしなか）を討ち果たし、義臣、忠臣の名をほしいままにした大石内蔵助にも鳥居元忠の血が間違いなく流れていたのです。